様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：14602
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 ～ 2012
課題番号：21520329
研究課題名（和文）　カミュ『幸福な死』と『最初の人間』研究

研究課題名（英文）　Reseach of “Happy death” and “The First Human” of Camus

研究代表者　三野　博司
（MINO HIROSHI）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：90117979

研究成果の概要（和文）：
本研究はカミュ『幸福な死』と『最初の人間』を主たる研究対象とし，同時に作家の全作品の読み直しと分析を試みた。その成果は，３年にわたる連載論文「カミュ，異境の正午」，および 2013 年 11 月刊行予定の著書『カミュを読む』，さらに『幸福な死』『結婚』『異邦人』『夏』『ギロチンに関する考察』『最初の人間』に関するいくつかの日本語およびフランス語による論文として結実した。

研究成果の概要（英文）：
The main object of this study was "Happy Death" and "The First Human" of Camus, and at the same time I tried to consider the whole of the creative activity of the writer. As a result, I published a series of paper for three years, whose title is “Camus, Noon in the foreign country”, finished a draft of the book "Reading Camus” that will be published in November 2013, and wrote several papers in French and Japanese about “Happy Death”, “Wedding”, “Stranger”, “Summer”, “Reflection on Guillotine” and “The First Human”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学

１．研究開始当初の背景

(1) 『異邦人』のおびただしい研究論文・研究書に比べると，『幸福な死』に関する研究は数少ない。まず 1971 年にこの未完の遺稿を編集・刊行したジャン・サロッキによる「『幸福な死』の生成」がある。またジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシは，1980 年に提出された国家博士論文，『アルベール・カミュの小説作品の生成』(『アルベール・カミュ，あるいは小説家の誕生』と改題し，2006 年ガリマール書店から刊行）において『幸福な死』に一章を割いて，『裏と表』などの先行作品との詳細な比較を行った。

申請者は，1981 年「『幸福な死』時との一致――カミュにおける瞬間と持続(III)」において，『幸福な死』に見られるカミュの時間

意識を精細に分析し,その後，1884 年クレルモン＝フェラン大学に提出した第３期博士論文においても，「沈黙」のテーマのもとでこの作品を論じた。さらに， 2007 年 12 月８日，関西日仏学館で行われた国際学会において，「退屈な日曜日，『幸福な死』から『異邦人』へ」を発表し，『異邦人』との比較研究によって，未完の遺作の特性を追及した。
(2) 『最初の人間』については，ジャン・サロッキが 1979 年に提出した国家博士論文『カミュと父の探求』(『最後のカミュ，あるいは最初の人間』と改題し 1996 年ニゼ書店から刊行）において「父の探求」のテーマのもとに詳細な分析を行った。また 2008 年にはピエール＝ルイ・レイによるフォリオ・テック叢書の一冊，『アルベール・カミュ，「最初の人間」』 が刊行された。これは『最初の人間』を総合的に扱った最初の本格な研究書であり，巻末の書誌も充実している。

申請者は，2002 年に刊行した『カミュ，沈黙の誘惑』(彩流社) の補遺論文として,「沈黙の物語――『最初の人間』」を発表した（フランス語版は 2007 年『ルヴュ・デ・レットル・モデルヌ』に発表された)。その他にいくつかの論文で『最初の人間』を他の作品と並べて論じている。2004 年，アメリカのミネソタ大学が刊行する英仏２か国語の研究誌『エスプリ・クレアトゥール』からの依頼を受けて書いた論文「３通の死亡通知」では，『異邦人』『ペスト』『最初の人間』を論じた。また 2008 年『カミュ研究』第８号の「父は死刑執行を見に行った」(フランス語版は『ルヴュ・デ・レットル・モデルヌ』第 20 号に掲載された）では，『異邦人』『ギロチン』『最初の人間』を論じ，3 作を通じて繰り返し現れる死刑執行と父の挿話について，その主題の展開を追究した。
(3) 申請者は平成 17 年－20 年度の「フランス文学における総合的生成研究――理論と実践」（科研，基盤研究 A(課題番号：17202007））に研究分担者として参加し，京都大学における例会での研究発表，および関西日仏学館における国際シンポジウム 「文学作品はいかに誕生するか？」での研究発表を行った。申請者はこれまでカミュ研究を主として主題論的，物語論的，文化論的な方法に基づいて実践してきたが，この共同研究によって，生成研究的方法を取り入れた。それは代表者であった故吉田城氏が提案したような「総合的」生成研究であり，草稿研究にとどまらず，作品の生成過程を文化史論的背景や，先行あるいは周辺テクストとの関連，作家の創作モティーフとの関連において，総合的にとらえようとするものである。

２．研究の目的
(1) アルベール・カミュがその生涯の初めと最後に構想しながらも未完に終わり，遺作となった２つの長編小説『幸福な死』と『最初の人間』を主たる研究対象とし， 両作品に見られる主題，とりわけカミュにとって生涯を通じて重要であった二つの主題である「貧民街の母と息子，母の沈黙」(以後，「母の主題」と略記）と「死を宣告された男，父とギロチン」(以後，「父の主題」と略記）を分析する。
(2) カミュの創造活動の出発点であった『幸福な死』と終着点となった『最初の人間』を，他の諸作品との主題的な関連において追求する。まず『幸福な死』と同時期書かれた初期作品である『裏と表』『結婚』，それに続く不条理三部作である『異邦人』『シーシュポスの神話』『カリギュラ』と『誤解』を扱う。次には、第二次大戦後のパリ時代に発表された反抗の系列の作品である『ペスト』『戒厳令』『正義の人びと』『反抗的人間』を論じる。そして後期の作品であり，『最初の人間』の執筆へと至る里程標でもあった『転落』『追放と王国』と遺作との関連を追及する。以上，カミュの生涯の初めから終わりに至る創作活動の全貌を明らかにして，「母の主題」と「父の主題」の観点のもとに，総合的研究を行う。
(3) 『幸福な死』『最初の人間』のそれぞれの個別研究はこれまでにも存在するが，この両者をつなげて，その間の作家の歩みの全体をあとづけようとする研究はほとんど例がない。申請者の研究は，『幸福な死』と『最初の人間』を２つの柱として，その間のカミュの創作活動をも視野に入れるものである。こうして，カミュの生涯の初めから終わりに至る創作活動の全貌を明らかにする。

３．研究の方法
(1) ① 2009 年７月２日，３日の２日間，フランス，エクサン=プロヴァンス市メジャーヌ図書館にあるアルベール・カミュ資料センターにおいて，『幸福な死』および『最初の人間』の草稿調査を行った。また 10 月３日～５日の３日間，アルジェリア，アルジェ市に滞在し，市内および近郊のティパサで，カミュの少年期・青年期に関する現地調査を行い，『幸福な死』と『最初の人間』の舞台となった土地についての情報を得た。
②『幸福な死』と同時期に書かれた初期作品『裏と表』『結婚』『異邦人』との主題的関連を明らかにした。初期のカミュは２つの系列の物語を構想していた。一つは「貧民街の物語，沈黙する母」(「母の主題」）であり，沈黙する母にどのような言葉を付与するかがカミュの文学的出発点であった。もう一つは

「死を宣告された男の物語，ギロチン」（「父の主題」）であり，カミュ自身の 17 歳以来の結核の発病とその後の再発，およびギロチンを見に行った父の姿と重ねられる。この２つの物語の関連について研究を行った。
③『幸福な死』，およびそれを母胎として生まれた『異邦人』との比較研究を，作中人物，主題，作品の構造などにわたって検討した。また，同時期に書かれた戯曲である『カリギュラ』との比較研究を，主人公の生き方，主題，作品の構造などにわたって検討した。
④　レヴィ・ヴァランシのカミュ初期作品研究の金字塔ともいえる『アルベール・カミュ，小説家の誕生』の再読込みを行って，深く検討し，レヴィ・ヴァランシがやり残した仕事を明らかにして，それを補うことをはかった。

⑵　①　2010 年 11 月４，５日，フランスのアンジェ・カトリック大学において開催された国際学会「アルベール・カミュ，『手帖』書くことの歓び」に出席し，欧米のカミュ研究者と情報交換を行った。カミュの創作手帖と位置づけられる『手帖』をテーマにした国際学会はこれが初めてであり，さまざまな観点からのアプローチを行った研究発表があったが，『幸福な死』と『最初の人間』の関連を追及する研究にとっても意味深いものであった。
②　2010 年 11 月 19，20 日，獨協大学国際フォーラム「カミュ，現在への感受性」に出席し，「ティパサのカミュ」と題した研究発表を行い，２つのエッセイ「ティパサでの結婚」「ティパサに帰る」を主として論じ，カミュにおける特権的トポスとしてのこのローマの廃墟のもつ意味を明らかにした。またこの国際学会に出席するため来日したフランス，アメリカ，ベルギー，アルジェリア，韓国の研究者たちと貴重な情報交換を行った。
③　『ペスト』から『戒厳令』『正義の人々』を経て『反抗的人間』に至るカミュ中期の諸作品の研究を行い，カミュの生涯にわたる創作活動の全貌を，「母の主題」「父の主題」のもとで明らかにした。
④　『最初の人間』研究としてパイオニア的仕事であるジャン・サロッキの『最後のカミュ，あるいは最初の人間』の精密な再読解を行って，サロッキがやり残した仕事を明らかにして，それを補うことをはかった。

⑶　①　2011 年 10 月 1 日および 2 日，アンジェ大学のプルトー教授およびオルレアン大学のバッセ教授と会見し，カミュ文献資料に関する情報提供を受けると同時に，相互の研究について情報交換を行った。
②　2011 年 11 月５日，パリ第３大学において開催された国際カミュ学会理事会に出席し，「３・11」と『ペスト』についての報告を行った。また同日午後に開催されたプロコープ・カミュにおける『正義の人々』に関する講演にも出席し，カミュ研究者と意見交換を行った。
③　創作ノートとしての性格をもつ『手帖』により『最初の人間』の生成過程を追求し，さらにカミュの後期の作品である『夏』『転落』『追放と王国』から『最初の人間』への主題的連関を明らかにした。

⑷　①　2012 年 10 月 3 日～5 日，2009 年に続いて二度目のアルジェ訪問を行った。今回は，アルジェリア大学名誉教授ナジェット・ハッダ氏と情報交換を行い，またカミュの少年時代，青年時代を送った土地での調査を再び行った。さらに 10 月６日，パリ第３大学において開催された国際カミュ学会理事会に出席し，また同日午後に開催されたプロコープ・カミュにおける「アルジェリア時代のカミュ」に関する講演にも出席し，カミュ研究者と意見交換および情報交換を行った。
②　3 年間の研究成果をもとに，『幸福な死』から『最初の人間』に至るカミュの全作品の検討を見直して，母の主題と父の主題の展開を明らかにした。
③　これまでの研究を通じて，カミュにおける新たな主題が登場した。それは彼が生涯を通じて，人間を襲う不条理な暴力的なるものと闘い続けたことであり，彼の作品はまさにこの闘いの表現であったことである。このため 2012 年 10 月には「アルベール・カミュ研究―暴力に抗する文学と思想」のテーマで新たな科研費申請を行い，2013 年 4 月に 5 年の予定で採択された。2009 年-2012 年の 4 年間にわたる科研費による研究を，今後新たに、いっそう大きな規模で展開させる予定である。

４．研究成果
⑴　①　2010 年 12 月，単著論文「カミュ，異境の正午（１）」（外国文学研究，第 29 号，奈良女子大学文学部外国文学研究会，p. 67-91）を発表した。とりわけ『幸福な死』へと至る修業時代のカミュの歩みと，「母の主題」「父の主題」の深化を明らかにした。
②　2011 年 12 月，単著論文「カミュ，異境の正午（２）」（外国文学研究，第 30 号，奈良女子大学文学部外国文学研究会）を発表した。ここで扱ったのは，『幸福な死』以降の不条理の作品群（『異邦人』『シーシュポスの神話』『カリギュラ』『誤解』），そして反抗の作品群（『ペスト』『戒厳令』『正義の人々』『反抗的人間』）である。
③　2012 年 12 月，単著論文「カミュ，異境の正午（３）」（外国文学研究，第 31 号，奈良女子大学文学部外国文学研究会）を発表し

た。ここで扱ったのは『夏』『転落』『追放と王国』，そして研究課題に直接かかわる『最初の人間』の４作であり，さらに「結論」を付して，３年間の連載が完結した。
④　以上の「カミュ，異境の正午」の連載論文執筆と並行して，『カミュを読む－評伝と全作品』の原稿執筆作業を進めた。これは 2013 年 11 月，アルベール・カミュ生誕 100 年記念としての刊行を予定している。『幸福な死』から『最初の人間』に至るカミュの歩みを，個々の作品分析を通じて明らかにする試みであり，400 字詰め原稿用紙に換算して 700 枚程度の草稿を書き上げた。

(2) ①　2010 年 10 月に刊行された『文学作品が生まれるとき』(田口紀子・吉川一義編，京都大学学術出版会）に，単著論文「カミュ『異邦人』から『幸福な死』」(183-202 頁）を発表した。
②　2011 年３月，フランス語による単著論文《Un dimanche de tiré – De la Mort heureuse à l'Étranger》 が，パリの Honoré Champion 出版社から刊行された *Comment naît une œuvre littéraire ?* に収載された。

(3) ①　2010 年 11 月 19，20 日，獨協大学国際フォーラム「カミュ，現在への感受性」に出席し，「ティパサのカミュ」と題した研究発表を行い，２つのエッセイ「ティパサでの結婚」「ティパサに帰る」を主として論じ，カミュにおける特権的トポスとしてのこのローマの廃墟のもつ意味を明らかにした。
②　申請者が代表を務める日本カミュ研究会発行の日仏語による研究誌『カミュ研究 Etudes Camusiennes 』第 10 号を，Philippe Vanney と共同編集すると同時に，同誌に仏語論文《 Camus à Tipasa 》を発表した。これは 2011 年 6 月に刊行された。

(4) 2011 年４月 30 日，著書『カミュ「異邦人」を読む――その謎と魅力』(彩流社）の増補改訂版を刊行した。増補にあたっては、第３部として「テクストの外部を読む――カミュと異邦人」をあらたに加えた。とりわけ『幸福な死』から『異邦人』の執筆に至るカミュの作家としての歩みを詳細に跡づけた。

(5) ①　2013 年９月刊行予定の“Cahier L'Herne, Albert Camus”の編集者である Gay-Crosier および Agnes Spiquel から執筆依頼を受けて，研究論文“La Peste et la force de l'alegorie”を完成させた。
②フランスで刊行されている哲学雑誌“Philosophie magazine”から執筆依頼を受けて，“La Peste a Fukushima”を同誌に発表し，平成 25 (2013) 年３月 24 日にフランスで発行された。
③　2013 年 6 月 1 日刊行予定の『カミュ研究 Etudes Camusiennes』第 11 号（カミュ生誕 100 年記念特別号）の編集作業を，Phippe Vanney と共同で行うと同時に，二つの論文『ペスト，アレゴリーの力』(単著）および『日本におけるカミュ受容』(共著，日本語および仏語）を執筆した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6 件）
① Hiroshi MINO, La Peste à Fukushima, Philosophie Magazine, 査読有, hors-serie, 2013, p.98-99
② 三野博司，カミュ，異境の正午（３），外国文学研究，査読無，第 31 巻，2012 年，p.71-90
③ Hiroshi MINO, Camus à Tipasa, 査読有， 2011， Etudes Camusiennes, No 10, p.37-46
④ 三野博司，カミュ，異境の正午（２），外国文学研究，査読無，第 30 号，2011 年，p.23-53
⑤ 三野博司，カミュ，異境の正午（１），外国文学研究，査読無，第 29 号，2010 年，p.67-91
⑥ Hiroshi MINO, « “Le père est allé voir une exécution", L'Étranger, Réflexion sur la guillotine, Le Premier homme », Albert Camus 22, Lettres Modernes (Paris), 査読有，2009 年，p.217-236

〔学会発表〕(計 1 件）
① 三野博司，『ペスト』アレゴリーの力，日本カミュ研究会第 54 回例会，2012 年 10 月 20 日，神戸大学

〔図書〕(計 4 件）
① 三野博司，かもがわ出版，「震災とフランス文学」『大学の現場で震災を考える』所収，2012，p.36-48.
② 三野博司，彩流社，『増補改訂版　カミュ「異邦人」を読む』2011 年，p.259-297（増補頁）
③ Hiroshi MINO, Honoré Champion (Paris), « Un dimanche de tiré – De la Mort heureuse à l'Étranger » in Comment naît une œuvre littéraire ?, 2011 年，p. 311-320.
④ 三野博司，京都大学学術出版会，「カミュ『幸福な死』から『異邦人』へ」『文学作品が生まれるとき』所収，2010，p.183-202

６．研究組織
(1)研究代表者
三野　博司　（MINO　HIROSHI）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：90117979